

『主人である司教マルシアルの 生涯と奇跡』試訳

渡 邊 浩

凡例

1. 本訳文は *Vita et miracula domni Marcialis episcopi* の試訳である。この文書の前半をなす伝記（生涯）は先に3回にわたって訳出した『リモージュ司教にしてガリアの使徒である聖マルシアルの伝記』¹に先行して成立し、その内容は後者の一部に取り入れられている。そのため、この伝記は『(より)古い伝記 (*Vita antiquior*)』、一方後者は『(より)長編の伝記 (*Vita prolixior*)』、とも呼ばれる。どちらも聖マルシアルへの崇敬が高まってゆく時代状況のなかで書かれ²、トゥールのグレゴリウスが『歴史十卷』の1巻30章で伝える記事とは異なり³、聖マルシアルの活動時期を使徒の時代に設定している。さ

¹ 1章から13章（拙稿『リモージュ司教にしてガリアの使徒である聖マルシアルの伝記』(I-XIII) 試訳『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第10号, 2009年, 59-75頁), 14章から20章(同, 第11号, 2010年, 99-115頁), 21章から27章(同, 第12号, 2011年, 93-108頁)。

² 成立時期について研究者の意見は異なるが, R. Landesによれば, 『古い伝記』はカロリング末期, 『長編の伝記』は10世紀後半から11世紀前半にかけて成立したと考えられている。特に, 後者の成立については以下を参照。R. Landes et C. Pauppert, *Naissance d'apôtre: La Vie de Saint Martial de Limoges*, Turnhout: Brepols, 1991, pp.14-21; R. Landes, *Relics, Apocalypse, and the Deceits of History*, Cambridge: Harvard University Press, 1995, pp.50-74.

³ トゥールのグレゴリウスが伝える時代は, デキウス帝による迫害があった3世紀半ばである。トゥールのグレゴリウス(兼岩正夫・臺幸夫 訳)『歴史十卷(フランク史) I』東海大学出版会, 1975年, 41-44頁。

て、『長編の伝記』が中世に広く知られていたのに対し、『古い伝記』は、11世紀前半に、既に失われたと主張されていた。今回、訳出にあたっては、アルペロ師が、自身で発見した写本を含む、いずれも不完全な4つの写本に基づいて校訂・作成したテキスト⁴を使用した。

2. ()あるいは[]内の語句は、訳者による補足あるいは注記である。

序文

諸聖人の祝福された行いを自らの言葉で飾ろうと欲するものはだれであれ、自らが引き受けた過度の重荷に圧倒されて才能を発揮し損なうことのないように、自分の心の強さを考慮しなければならない。それでも、その者が語る力に際立ち、才能ある言葉を欠いていないのであれば、これらの仕事に取り組みねばならない。それゆえ、私は、証聖者という彼の称号によって（この書物に）取りかかるよう促されたのであるが、この証聖者の一連の行いを提示しようと思っているので、私の文体が書簡でのやり取りに見られる以上につまらないものと見なされるのではないかと恐れている。実際、いくらかの学識ある人々、それから、詩作において手本となり、哲学があり、雄弁の基準となるような才気煥発な人々は、ほとんどマロー（ヴェリギリウス）の文体にまで到達しているけれども、彼らがそのような企てに取りかかり始めると、彼らの自信は急速に失われ…[欠落]。

それに対して私は、ムーサのか細いささやきにかろうじて満たされているだけだが…[欠落]。また、私の望むことを飾りのある言葉で言い表すこともできないとしても、少なくともここで語った話を再び取り上げようとする者は、ここに描かれた出来事の題材を見事な文体へと仕上げるだろう。

⁴ L'abbé Arbellot, "Étude historique sur l'ancienne vie de saint Martial", *Bulletin de la société archéologique et historique du Limousin*, t.40. (1), 1892, pp.238-248.

伝記が始まる。

かくして、なおもガリア人たちの地方において、多くの町がいろいろな典礼の祭儀で栄えていた。それらの町のなかには、当時リムーザン人たちの町があったが、その町は様々な守護神の祭儀に溢れ、また誤った儀式に大いに夢中になっていて、そのためその住民のだれも主の名を呼び求めることを知らず、また救いに役立つ洗礼の恵みで神聖な者となり、神の儀式に専念することもなかった。それは、いとも至福なるペテロにローマ教会の舵取りの職務が委ねられていて、また全世界の諸都市におけるこの崇高な司教座の計画と信仰への一層の献身とが彼にかかっていたときであるが、こうした時期にペテロはキリストの名のために、あらゆる地方がカトリック教会の教えと教義によって導かれるよう熱心に働いていた。

このようなわけで、ガリアが多くの瀆聖行為に従っていることを知ると、彼はあちこちの都市に司教たちを派遣した。それは、彼らの教えによって民衆が自分たちの信仰対象としてキリストの名を得るためであった。そして、前述の最大の町では、それぞれの神殿において古さが独自の権威をもって保証しているとおり、だれも高慢ゆえの冷淡さから、行為で示して主を告白していなかったので…[欠落]。その事情は、司牧者の配慮をもって調査されると、ローマ教会の座の最高位へと上げられたキリストの弟子、いとも至福なる司教ペテロのところへ届いた。彼はこうした事情によりやく耐える一方、人々が多くの誤りに熱心に従っていたので、その人々のところに説教のために派遣しようと呼び寄せておいた神に相応しい人、司教マルシアルを、自分のところに呼んで、次のように言った。

「いとも聖なる兄弟よ。我々の師であり主であるイエス・キリストが神聖で敬うべき復活の後、不思議な姿によってではなく母より受けた姿形で私たちに現れたときに、私たちに命じて次のように言われた。『私は天と地の一切の権能を授かっている。だからあなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、そして、あなたがたに命じておいたことをすべてを守るように教えなさい（「マタイによる福音書」28章18-20節）。』いとも至福なる兄

弟よ、このことを我々二人が覚えておくことが大切です。我々が主の教えを忘れることのないために。さあ、とても優れた者よ、だから行動しなさい。そして私の言うことに従いなさい。従えばあなたは我々の仲間に加わる者となります。腰を帯で締めなさい。少しも躊躇うことなくなるべく急いで行きなさい。猶予することなく、悪霊に仕えていると知られている人々を、神の崇拜という真の完全な信仰へと導きなさい。その人々が異教徒の誤謬から離れて、キリストへの信仰を告白できるようになるためです。あなたには長い道のりが残っているのだから、私の言葉に従うのを躊躇ってはなりません。あなたは、その私の言葉によって、立派な褒美として自分の栄冠を手に入れるでしょう。

実は、ガリア地方には、リモージュという名の、異教の誤謬に夢中になった町があります。あなたの伴侶となることを喜ぶ、また栄冠という褒美を損なうことのないような二人の司祭を連れて行きなさい。もし追い剥ぎがあなたに立ち向かって来たなら、その人殺しに首を差し出すほどの覚悟で振る舞いなさい。そして、あなたの右の頬を打つ者には、左の頬をも向けなさい。また、あなたの下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい（「マタイによる福音書」5章39-40節）。それほどまでに穏やかな気持ちでいるようにしなさい。」

そして、遅れることなく、いとも聖なる人は二人の司祭を伴侶とすると、キリストの弟子によって命じられたとおりに、旅路についた。そして、彼が旅を始めて道を急いでいると、こともあろうに伴侶の一人が亡くなった。これを見て、いとも至福なるマルシアルは不安になって大急ぎでローマへ引き返し、旅の途中で自分の身に起こった一切をキリストの至福なる弟子に報告した。彼はマルシアルにいろいろと尋ねると、彼に向かって次のように言った。「私の杖を手にとってできるだけ急いで行きなさい。亡くなった兄弟を残して来た場所に着いたなら、それで死者の亡骸に触れなさい。私は繰り返して主に祈りましょう。そうすれば彼は直ちに眠りから覚めるように目覚め、すぐにあなたの伴侶となるでしょう。」そしてこのことは、人々の噂が証言しているとおりに起こったのである。また、そのことは、福音書の意味にしたがって理解すべきであると、私には思われる。すなわち、主は弟子たちに次のように言われた。「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここか

ら、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる（「マタイによる福音書」17章20節）。さて、杖で触れられると、血の気を失っていた四肢は直ちに命を取り戻す。そして死んだときに失っていた光を、彼は自らの目で見始めた。それゆえ、この出来事をだれが次のように考えずに疑うだろうか。至福なるペテロの信仰が、彼が命じた行為をとおして明らかとなったのであり、そしていとも至福なるマルシアルは、自分を飾るこれらの手本と報償によって促されたのだ、と。

かくして、予定の日になちを経て、目的地に定められた町に到着したとき、彼は大勢の人々が偶像に対する様々な礼拝に夢中になっているのを見出した。そして彼は熱心にその者たちの耳に主の言葉を忠実に説き始めた。そして彼は自らの説教によって人々を改宗させ、わずかな日にちしか経たないうちに、救いに役立つ洗礼のしるしを、あるいは十字のしるしを、自らの額に求めない者がいないほどになった。その場所で、彼は神の名において、人々の魂を主イエス・キリストにおいて最大限刈り取るという自らの労働の稔りを納屋に集めたので、あるいは、異教徒の大多数が迷信を捨て去って彼の説教に耳を傾け始めたので、彼は繰り返し諭して（人々を）恩寵へと導いたのである。

ヴァレリアという名のある娘は、人々の言うところによると、高貴な家柄の出であったが、生まれの血筋よりも気高い信仰、むしろ永遠の報いへの信仰によって、神に気に入られていた。そして彼女はある男と婚約し、結婚することになっていた。彼女は足繁く神の人のところへ通っているとの噂が広がっていて、彼女が彼の忠告にしたがって洗礼の恵みを受けるに到ったと言われるほどであった。また、後にこう噂されるほどであった。すなわち彼女はキリスト教徒となって、取り決められた結婚を果たすことを望まなかったので、まだ異教徒であった彼女の婚約者によって殺されたのだ、と。そして彼女は、愛する人のために、言われているところによると、神の人、聖なるマルシアルが旅に疲れ、また仕事と高齢のために衰弱したので…[欠落]。前述の娘は自分の亡骸のために用意されていた墓を…[欠落]。神の名において、至福なるマルシアルが、この世の光から主のもとへと旅立ったとき、至福なる人の亡骸がそこに埋葬されるのを認めたことを付け加えた。

どうしてこれ以上多くを語ろうか。今や時が迫っており、秀でた人は

主のもとへと旅立った。彼とともにやって来ていた司祭たちはなおも生きてそこに留まった。そして時が満ちて、彼らも世を去ったとき、至福なる人が埋葬されていたその同じ場所に、彼らもまた葬られた。

さて、(証聖者の墓は)二つの墓の間であってそこに近づくのが困難だったため、また、自らの証聖者が長い間目立たずにいるのを主が耐えずにすむように、そして、彼らが埋葬されていた地下聖堂は出入りするキリスト教徒で溢れていたのも、また、意見のある人々にいろいろと耳を傾けるなら、墓は互いの間が近すぎると思われていたので、神意によって次のようなことがなされた。すなわち、人々が墓を探しているときに厄介であった原因が神の不思議な力によって取り除かれたのである。つまり、次のようなことが生じた。人々がいつもの祈りに専念しようとして戻ってきたとき、どの墓に司教が入っているのか人々に明らかとなるように、それぞれの墓が互いに分けられ隔てられているのが見つかったのである。

聖マルシアルの奇跡

かくして、いとも至福なるマルシアルがいかなる奇跡をもって自らを現わしたかを、明らかな報告によって私が知ったとおりに、以下の書物に書き入れるのがふさわしいと思われる。そうすることによって人々が大いに驚嘆せんことを。

I.

ある娘は片方の手が麻痺し、爪の先が手のひらを突き刺すほどであったが、聖マルシアルの墓に赴き、そして情けをかけてくれるよう懇願した。そして彼女が声を出して祈り続け、床に伏していると、神の配慮を得て、麻痺した手にかつての健康を取り戻すことができた。そしてこの奇跡は、彼の祝日に集まって来ていた人々が居合わせるなかで行われた。

II.

一方、その同じ夜に、そこでいかなる奇跡が起こったか、決して黙っているべきではないと私は考えた。生まれつき口のきけない者がおり、彼は舌がまわらなかつたとはいえ、それでも心の中で至福なる人の記念堂にお参りしたいと念じた。教会に入っただけで心の中を主へ祈りを

注ぐと、もつれた舌が自由になる。そして彼はたちまち話題や噂の種となった。

III.

また行いの報いとして生じたことも見逃されるべきではない。すなわち、人々の強情は常に執拗なものであり、自分に帰せられたなんらかの罪を、告白によって吐き出すよう求めるほどである。たまたま以下のようなことが起こった。ある者が教会に入ったが、それは自分に帰せられた罪をしぶしぶ弁明しなければならなかったため、またそうすることで彼の罪が明らかになると思われたからであった。彼が教会に入るや、舌がもつれて、彼の口は閉じてしまい、そのため虚偽の告白を行えなくなった。それどころか、彼の声はまるで羊の鳴き声のようになった。ところで、彼はこの証聖者の墓のところへ来て、身を投げ出して祈った。そこに彼がしばらく横たわっていると、だれかが自分の喉に触れたように思われた。そこで彼は、ちょうどその時に勤めを任されていた司祭に目配せをし、自分の喉に十字の印をつけてくれるよう手で合図した。そのようにしてもらおうと、その男は床に身を投げて一心に祈った。そして彼は床から起こしてもらおうと、声が出せるようになり、自分の身に起こったことすべてを、自らの言葉で人々に明かした。

IV.

ある女が自らの不幸である恥ずべき不貞、すなわち肉の過ちを犯したところ、彼女はこの破廉恥行為のために身を委ねた男とともに、自分の悪事を恥じて思いとどまり、二人で聖マルシアルの教会へと赴いた。それは、公に判決が下されて、裁判官たちから罰に従わされることのないようにするためであった。さて見張りの者たちから逃げ足で逃れると、彼らは至福なる司教の墓へとたどり着いた。そして門番が気づかなかつたために、彼らは禁域の内部に閉じ込められる。二人がそこで懲りもせず不幸な行為に及ぶのは疑いない。戸は開かず、壁は抜けることができず、窓ガラスも壊せなかったが、彼らは神の指図によってある池へと追い払われた。それは、遠くからは、教会の近に見えた。そして夜が明けると、人々が大勢集まり、二人は立っているところを見つけた。それは、このようにして、彼らの不幸な行為が明るみに出されるためであり、また、いとも至福なる人の奇跡をなす力が、これらの出来事によつ

て明らかにされるためであった。

V.

主が同じ証聖者をとおして行われた次のことも付け加えられるべきである。すなわち、ある夜に次のようなことが起こった。ある女が喉の渇きに駆り立てられて、喉の熱さを和らげようと、明かりをつけずに水を容れておいた容器を手を取った。そして夢中になって飲んでいて、ごくりと一飲みしたときに、彼女は気づかずにヘビをも飲んでしまった。そして、ヘビを体内に留めたまま、彼女は重い病にかかった。そして彼女は治癒を得ようと、いとも至福なる人の教会へと行った。そこで彼女が祈りに専念していると、内蔵が震えて、ヘビを生きたまま吐き出した。そしてヘビを吐き出すと、彼女は健康の恵みを得て、自分の家へと帰った。

VI.

手元の文書が証言していることが、この著作に付け加えられるべきである。聖なる証聖者の教会で礼拝を手伝う者たちの一人に、マルクルフスという名の者がいた。彼は悪魔のそそのかしに促されて武器を取ると、至福なる人の墓所のある礼拝堂に入り込み、墓の上に飾りとして掛けられていた十字架に手を伸ばし、密かに盗み取った。その十字架が輝かしい奇跡を引き起こすと、彼は様々な地方の辻をめぐり、この十字架を売って金を得ようと市で売りに出した。しかし、だれも決してこの十字架を買おうとはしなかった。そして、彼が長い間あちこちを歩き回り、持ち歩いている商品売って儲けを得ることもできないでいるうちに、彼は我に返って羞恥心に動かされ、悪に誘う敵の企みによって十字架を盗み出した場所に、一年かそれ以上の年月の後、自ら十字架を持って出頭した。そして彼は告白によって自らが行った行為を明かした。

VII.

なお最近においても、彼の力による際立った奇跡が輝いている。ある者が役人の番兵に引き渡され、鎖で固く縛られて拘留されるという出来事が起こった。番兵たちが眠気に襲われると、夜に彼は番兵の目を逃れ、まだ鎖を付けたまま聖マルシアルの教会へ行った。彼は教会に着いたが、やはり扉は閉じられていた。縛られたままの彼が直ちに解放されるようにと、鎖がうち砕かれた。さらにその鎖は、人々が証人として見守るな

か、計った上で粉々に砕かれ、等しくふるい分けられている。

VIII.

同様の事件で、別の者がその種の棒に首を縛り付けられ、牢屋の番人のところへ引かれていくとき、神の聖なる僕に助けを求めた。直ちに木の枷が彼の首と手からはずれた。おそらく殺人事件で容疑をかけられていた彼が刑罰を免れていることが、明らかにされるためであった。

IX.

その他の奇跡について語ろうとするなら、文書に書かれたものが私の手元にある。神の人がしばしば紛れもない奇跡をもって自らの存在を示したとはいえ、それでも最近の文書は以下のことを証言している。二人の人物がやって来たが、一人はトゥールの町の出身、もう一人はこの地方の出で、二人ともドモレヌスという同じ名を持ち、ともに四肢が不自由であった。彼らは足よりもむしろ手で身体を動かさねばならないほどに四肢が硬直していて、身体の働きを取り戻すために、いと至福なる人の記念堂へと行ったのである。そして彼らは神聖な墓所に休むことなく通い始めた。そして筋肉と血管のもつれが解かれるよう祈った。すると彼らの信仰の深さゆえに、彼らの四肢の麻痺は癒される。そして、他人の手を借りて連れて来られていた彼らが、自分で歩いて墓から帰っていく。

X.

奇跡に帰せられ得る次のことも付け加えられるべきである。ブルジュの町の地方出身の盲人が、光を取り戻そうと付き添いに手を引かれて旅に出かけ、聖なる司教の奇跡が絶えず輝いている場所まで連れて来られた。そして、光の代わりに闇しか見えない状態で、聖なる証聖者の教会に入ると、自分をいと至福なる人の墓のところに置いておいてくれるよう頼んだ。それから彼はずっと床に伏せたまま、自分が失った光を取り戻せるよう、祈りを捧げて願った。彼がひたすら嘆きうめいていて、そして頬が血の涙で洗われたのを感じると、涙の滴がゆっくり落ちて、溜まっていた悪いものがすべて目から洗い流される。すると、長い間、昼が夜のように感じられていたその盲人に、光が取り戻される。そして、至福なる人の墓へは他人に手を引かれて連れて来られた彼であったが、自分で歩いて故郷へと帰った。

神の忠実な僕たちのなかでもっとも至福なる証聖者の奇跡について、噂の広がりとともに私の耳に届いたできるだけ多くのことを、巧みな言葉によってではないとしても、この書物に書き加えるべきと、私は考えた。さらに、他の奇跡は、たとえ人々に隠されていても、神にとってはすぐ近くで、なすわち悪霊の駆除、身体の働きの回復、病人の症状の緩和、あらゆる治癒という種々の贈り物において、明瞭に輝いている。

それゆえ、ともに祈らんことを。将来の審判において、子羊が子山羊から最後の籤によって分けられるとき、雪がれるべき罪の汚れについて彼が我々の弁護人として助けてくだされるように。また、永遠に生き支配される我らの主イエス・キリストが目の前に立たれているとき、我々が彼の保護を得て左側から右側へと移ることができますように。アーメン。